

なでしこの花が咲く。サッカー女子が合宿の風呂で、男子たちと入浴

「えっ？男の子だけじゃないの？」

旅館の主人が、少年サッカーチームのコーチに言う。

「はい。実は女の子がうちのチームには1人います」

コーチが答える。

「まずいなあ。男の子だけだと思って、30分はお風呂を貸し切りにしたんだけど・・・」

T少年サッカークラブは合宿に来ていた。

コーチの知り合いが営んでいる旅館で、合宿を行っていた。

知り合いの旅館ということで、格安で泊めてもらっていた。

ただ、小学生がたくさんくるということで、他の客の迷惑にならないように、旅館の風呂への入浴時間は決められていた。

一般の宿泊客が入浴する前に、小学生たちの入浴を済ませる予定だった。

この旅館の風呂場は1箇所だけだった。

時間で、男女の入浴時間が決められていた。

旅館の主人は、サッカーチームには男子しかいないものと思っていた。

でも、T少年サッカークラブには、1人女子が混じっている。

小学6年生の笹田琴美だ。

「どうしようか」

旅館の主人が困り顔で言う。

「他の一般の女性客と一緒にの時間に入浴させましょう」

コーチがそう言った。

「うーん………」

旅館の主人は依然、困った顔を浮かべている。

「それではダメですか？」とコーチが尋ねる。

「いや、ダメっていうわけじゃないんだけど、この旅館は、ほら、隠れ家的な旅館だから、落ち着いた高齢の宿泊客が多いんだよ。だから、子供連れなんかはほとんどいないから、落ち着ける宿だと評判なんだ。そこを無理言って、小学生の宿泊施設として許可したわけなんだけど、風呂で女性客がゆっくりしているときに、小学生女子がいたりしたらなあと思ってなあ」

「そんなうるさい女子ではないですよ。笹田琴美という女子なんですけど、いい子ですし、ご迷惑はかけないと思います」

「うーん、でもなあー」と主人はやはり浮かぬ顔だ。

最近では、旅館の経営において、泊った人の口コミやレビューというものは極めて大切だ。以前、泊った家族連れが、かなり騒がしかったことがあった。

その家族連れに対して、お客なので旅館のスタッフは注意をそれほど強くはしなかった。

そのせいで、他の客からたくさん、悪い口コミやレビューを書かれていたのだ。

元々、隠れ家的な落ち着いた旅館であることが売りなので、しばらくは、その口コミもあってか、売り上げが落ち込んだことがあった。

それ以降、旅館のホームページなどは、さらに隠れ家感を前面に押し出し、落ち着いた大人だけをターゲットに売り出していた。

暗に、小さい子供がいるような家族連れは、来てほしくないというニュアンスを出していたくらいだ。

そんな折に、サッカークラブからどうしても、宿泊施設として、受け入れてほしいと話があり、渋々ながら受けたという経緯があった。

だから、旅館の主人としては、小さな子供が騒ぎ立てるということが、軽いトラウマのようになっていたのだ。

そのために入浴時間を、宿泊客と完全に分ける対応をしていた。

「いやー、あなたにはお世話になっていたし、力になりたいとは思ってたんだけど、やっぱり受け入れない方がよかったかなあー」

旅館の主人はそう言った。

嫌味を言うつもりはなかったけど、どうしても、嫌味な言い方になってしまう。

「すみません」とコーチが言う。

「わかりました。笹田には、みんなと同じ時間で風呂に入るように言います。私がしっかり監督します」

コーチはそう言った。

「そうか。それなら、うん、大丈夫だろうから頼むよ」

こうして、小学 6 年生の女子、笹田琴美が男子たちと同じ時間に風呂に入ることが決まった。

「いやー疲れたなー」

「この後、風呂に入るらしいぜ」

今日の練習を終えた、サッカーチームの小学生たちが、旅館の風呂場を目指していた。

全部で、15 人の小学生がいる。

笹田琴美以外は、全員男子だ。

「おーいみんなー。絶対に旅館の中では騒いだりはするなよー」

コーチが全員に声をかける。

「これから、風呂に入らせてもらうけど、全員一緒に入るから。時間は 30 分で決められてるから、全員時間内にさっさと入れよー」

「はい」と男子たちから声が上がる。

「コーチ、まさかですけど、私もみんなと一緒に入るんですか？」

笹田琴美がコーチに質問する。

「当然だ。笹田も俺たちのチームの一員だろ」

コーチはそう答えた。

かなり無理があるとコーチ自身思っていたが、ここは、強引に押し通そうと決めていた。

笹田琴美の顔から血の気が引いていく。

そして、男子たちが、小声で騒ぎ始めていた。

「おいっ。マジかよ」

「笹田が、俺らと一緒に風呂に入る？」

「マジかよ。風呂ってことは裸だよね」

「じゃあ俺たち、笹田の裸を見れるってこと？」

旅館の風呂場へと近付いていく一行。

その心中は全員穏やかではなかった。

コーチは、何ごともなく終われるのかどうか不安だった。

笹田琴美は、チームのメンバーに裸が見られてしまうかもと、動揺していた。

男子たちは、サッカーチームの紅一点、笹田琴美の裸を見ることができるかもしれないと、興奮していた。

笹田琴美は黒髪ショートカットのかわいい女子だ。

体格はそれほどではないけど、テクニックがあって、サッカーが普通にうまく、15 人いるメンバーの中でレギュラーだった。

ポジションは中盤の左サイドで、試合で点を取ったりもしていた。

ただ、笹田琴美以外は全員男子の中、1 人だけいる女子である。

他の男子たちは、ときおり、笹田琴美のことを意識してしまうことはあった。

明らかな違いが出てくる部分が、胸の膨らみだった。

まだ小学 6 年生なので、それほど体格の違いが出てくるわけではない。

それでも、笹田琴美の胸は膨らみ始めていた。まだまだ、つぼみの段階ではあるけど、明らかに膨らみは見て取れた。

練習中、チームの男子が、たまたま競り合う中で、笹田琴美の胸に手が当たってしまうようなことがあった。

その光景をメンバーの男子全員が見ていた。
練習が終わった後、その胸に触れた男子は笹田琴美がいないところで、他の男子に質問攻めにあった。

本当にわざとじゃなかったのか、どんな感触だったかなど、くだらないことだった。

でも、小学生男子たちの性的な興奮材料にはなった。

そして、その笹田琴美の胸を揉んでしまった男子は、その晩、初めて、精通を経験することになった。

普段は、女子だと意識することなく、あくまで同じサッカーチームの仲間である笹田琴美。
でも、ときおり、強烈に女子として意識される。
そんな紅一点の笹田琴美と、他の男子たち 14 人がこれから、風呂に入ろうとしていた。

「さー、着いたぞー。静かにさっと済ませるぞー」

コーチがみんなに指示を出す。

「コーチ、タオルは。タオルが全然ないんですけど」

笹田琴美があたりを見回しながらそう言う。

コーチも探してみたが、風呂場にはタオルが 1 枚もなかった。

「あー、もしかしたら、まだセットされていないのかもしれない。俺たち、普通に入る時間よりも前に、入らせてもらっているから」

実際にその通りだった。